



二世



佐山文庫



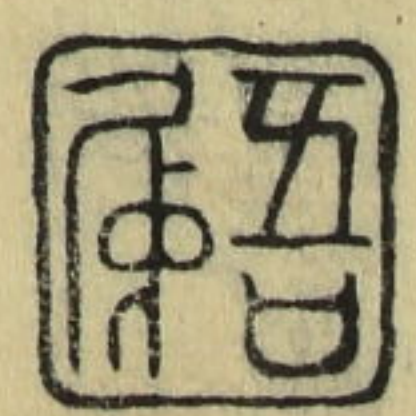
卷之三

と併べり誹諧と俳諧の両家入りて中右
の誹諧と連言行ていふこと今世誹諧と俳
諧とて次をえりて法を後ちりて決をせり
毛のよえ中の弟子ありて法を才とて
とて運てとて持のれといふこと
天下の誹諧師梅のそものちん狐子と牡丹の
種を知とやとてぬくと俳のそんとその
ちん狐子と牡丹の誹諧のよき事とて
と本歌とて武陵の書送符とて
たぬ文鑑とありてけけと和漢文採と

才一と秋のちん狐子と牡丹の
ちん狐子と牡丹の誹諧のよき事とて
と本歌とて武陵の書送符とて
たぬ文鑑とありてけけと和漢文採と
とて運てとて持のれといふこと
天下の誹諧師梅のそものちん狐子と牡丹の
種を知とやとてぬくと俳のそんとその
ちん狐子と牡丹の誹諧のよき事とて
と本歌とて武陵の書送符とて
たぬ文鑑とありてけけと和漢文採と

田打も新書よりして武のよ月花と詠まへん
も論語の孫のりありまう文字のあつらん
むつらん子も是れ部し合語をるげ能治
の丹まをともひく假名をよふの二様いふ
いふと文鑑しつと踏し今と文操しと意と
序と二集の我あめ規模して和漢しとらる
け時ちるる

享保癸卯三月日



和漢文操

真名序

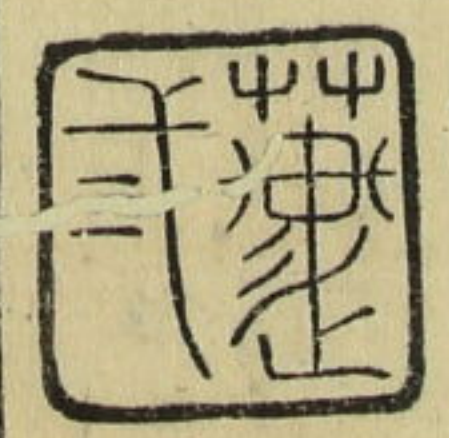
蓮二房

和漢文操者先師之遺書而將令知真名
有和漢之通用事上與也故先撰大和詞
而通五十余頁之助語訓二百七箇之文
句然則真名之為假名也諧楚辭文選之
言端却調源氏袂衣之出葉歷見之時者
漢字也共甫之時者倭文也来首者如軍
書牒狀今者如庭訓往来其外寺社之縁

起^{トテモ}建^レ磨^レ諺^云不^レ田^ニ于^レ烟^ヲ而^レ例^ニ與^レ和^レ訓^之點^ヲ
了^レ則^ニ無^レ可^レ讀^ル道^理之^レ法^ヲ果^シ矣^是以^テ大^和詞^者
者^詠文^立五^條之^レ法^ヲ而^レ或^ク者^用古^今之^レ兩^様
樣^居或^者隨^正諷^之故^實歷^假令^雖一^字
一^點不^レ容^和訓^之私^為也^近頃^有我^朝之^レ
學^者達^而助^字考^之用^字格^之殊^如詠^文
全^跡者^博知^漢土^之書^物而^レ隨^其書^而盡^其
事^共信^此文^而不^レ設^彼理^則乍^有字^意
之^運全^無和^訓之^便要^左則^一一^附假^名
而^謂者^某字^于某^意則^奚乎^可讀^無魚^之

矣^耶譬^則如^些字^之詞^和訓^左字^共思^些
共^而不^立我^國之^レ用^猿乎^者漢^字者^有何^益
益^矣耶^爾有^則從^我朝^之神^書帝^詔云^院
宣^之如^文官^之促^國法^如武^士之^レ傳^家訓^公
公^侯之^レ制^札者^增而^不言^佛家^之誦^誦麼^神
神^社之^レ願^狀麼^字之^レ而^擴之^則何^歟者^增
之^不明^矣有^媚度^雁魚^之信^樣者^言則^謂
我^朝之^レ耻^矣此^故從^寶永^之御^代試^製平^假
假^名之^レ詩^而今^也為^交真^名詩^于假^名詞^用
假^名詩^于真^名韻^平蹤^夫以^我朝^之詩

歌^ラ足^リ欺^ク諸^レ越^ル人^ニ也^{ナリ}矣^{ナリ}况^ヤ如^キ清^朝之^レ奧^儀抄^ノ
 和^レ歌^ニ有^ル求^ル韻^ノ之^レ沙^汰則^チ我^レ家^ニ亦^モ有^ル求^ル韻^ノ
 之^レ俳^諧其^レ外^ニ聚^ル日^本之^レ俗^話而^{シテ}以^テ里^巷之^レ
 謡^ヲ雅^朝廷^之歌^ヲ了^ス共^ニ不^レ嘗^テ違^フ詩^經之^レ六^義
 者^レ誠^ニ謂^ハ和^漢之^レ文^操者^レ矣^所仰^ル者^レ敷^嶋之^レ
 流^ヲ不^レ斷^ニ永^ク傳^テ千^年之^レ跡^ヲ而^{シテ}不^レ霞^ニ之^レ神^之冥^ヲ
 慮^ラ矣^止維^テ時^享保^泰癸^卯之^レ秋^運二^等續^師
 之^レ遺^命而^{シテ}叙^ス黃^山之^レ文^星觀^者也^{ナリ}



和漢文操

凡例

一 和漢ノ文法ニ句讀ノ點ヲ附ル事ハ本朝文鑑ニ論^レレ^ルニ
 讀^ヲ先^ニシ^テ句^ヲ後^ニス^ルハ漢^家ノ故^實ニ隨^フテ讀^ハ膏^ニ
 ニ^スル^レ句^ハ中^ニニ^スル^レ夏^ハ傳^ハ文^ノ新^式ニ據^テキ^テ季^細
 之^レ自^見賦^ト目^見賦^ニ和^漢式^ノ兩^様アリ^テ学^人ハ^ニ篇^ノ
 ノ^レ點^式ヲ考^テ何^レニ後^勤アル^キナ^リ
 一 大和ノ直^以各^文ハ漢^文ヨリモ手^余波^ノ多^クシ^テ或^ハ連^綿ノ
 語^ヲモ合^テテ句^ト讀^トノ字^數ヲ合^ス故^ニ漢^文ノ字^兩

ト八違タル所モ有レシ去ルハ漢廉カ日東曲ニ云ル嘯セツ啓キヲ
直ニス嘯セツト云ク故コト字ヲカレカニト訓スルハ語路長短
ハ各別ニシテ字配ハ日本ノ国曲ト云キスレ

一 大和ノ真名文ニ漢土ノ助字ヲ用ル言語ト文句トノ
差別アリテ大和詞ニ五條ノ法ヲ出セリ此故ニ文賦ニ
新製長ノ助訓ヲ知セント言語ハ右ニ点シ文句ハ左ニ
点ス一部ノ助字ハ其賦ニ知レ然レ古来ヨリ用習ユ之
之半者也ノ如キ于於而則ノ如キ一字ノ訓美ハ助辭
ノ常トハ多ニ圖点ヲ加ルニ及ハス去氏細ニ和訓ヲ論セハ
詞内ノ句アリ句内ノ詞アリテ文句ニ從ハ句点ヲ加

言語ニ從ハ語点ヲ加フ讀時ハ其埒ヲ考レキナリ

一 此文採ニハ只ノ新製長アリ其ハ真名ノ和文ニ入ルニ
ハ真名ノ和詩ナリ去ル實永ノ幸知ニ新ニ大和詞
ヲ撰テ漢土ノ助辭ヲ俾語ト成セニ五條ノ法アリテ一字私
ヲ容レス言語ト文句ノ兩様ハ美ノ款文ニ據ルナリ且ニ
ハ假名詩ニカコ果蘇ノ韻ヲ用ク其四ハカコ果蘇ノ韻ニ效テ
熟語ニテ二字韻ヲ用ユニ以テモ漢家ノ韻法ナリ且ニ
ハ連歌ト俳諧ト漢和如ク交會シテ凡雅ノ四録ヲ結ン
トナリ其六ハ和歌ノ家モ求韻ノ沙汰アル増テ俳諧
聯句ニ似テ韻ヲ求ル須ス便アルト換韻ノ法ヲ制スルニ

短歌行ハ四六二十四句ニ分チ長歌行ハ六八四十八句ニ
分チ何レモ二折ノ表裏ニシテ畢竟ハ換韻ノ埒ト知レシ
歌仙行ハ例ノ釈ニ及ハス其七八大和聯句ナリ此格ハ羅山
ノ七字城ニ似テ既ニ例ト云キニ彼ハ字行ノ古法ヲ對シ此ハ
字外ノ新趣ヲ對ス其例ハ詩文ノ意對ニ效テ氣取ニ生
植ヲ對ス類ナリ此等ヲ温故知新トヤ云シ其ハ八ノ聯類
ヲ以テ標題ト成セル也但シ和漢ノ文佳キニ遺スラ拾ト云
キヤ此外詩歌モ文章モ時溘ハ新制ハ指ラ倒スニ
暇アラズ然レテ前撰ノ文鑑ニ假名詩ヲ制シ引類ヲ改メ
或ハ辭類ニ和漢ノ論モ後撰ノ文操ニ八品ノ新制ニ

總テ八祖又云羽ノ遺訓トカウ論トハ滅後ノ筆功ニシテ
獅子菴ニ例ノ遺稿ヲ覆リテ百廿ノ師道ヲ失ハス家
ニ俳諧ノ中興ト云キナリ

一 每篇ノ註曰ハ故事ハ此里角ヲ加ヘ古語ハ此白角ヲ
加ヘ古詩ハ此里園ヲ加ヘ古歌ハ此白園ヲ加フ但シ漢歌
ハ詩ニ準スレシハ此鍵点ノ下ハ愚按ヲ以テ多ハ章句ノ儻ヲ
註シテ文ノ斷續ト起結トヲ知レム其中ニ文法ト句格ヲ稱ス
時ハ黑園ヲ加テ絶妙ノ二字ヲ用テ絶妙好辭ハ曹娥碑ニ
銘シテ文章ノ讚詞ナリ

一 每篇ノ序云ハ才ハ其篇ノ梟同ヲ稱シ才ニ作者姓名

ヲ記ルス然レテ註ト評ト合セテ毎章毎節ノ起結ヲ考ヘ毎章ハ
法格ヲ知ル時ハ和漢ノ通用ハ自然ト知ケン但レ註解ニ及ケン
評詞ニ兼用ノ取モ有レシ

一 此文集ホニ註者ヲ博望司ト云ク評者ヲ厚有仙ト云ク
何レモ獅子門ノ親中ト見レト前後ノ撰集ホニ此名ヲ聞
カス然レハ二人ハ寓各ニシテ選場ニ自稱ヲ憚ル古法ノ
辭宜ト知キヤ有無ハ巻軸ノ糸文ヲ見テ儒仙ノ
一乃巻ヲモ知キ更ナリ

和漢文操目錄

○ 卷之一

賦類

- 乙 日月賦
- 月花賦
- 月見賦
- 雪見賦
- 文賦
- 笠賦
- 豆腐賦
- 有磯賦
- 幻住庵賦

○ 卷之二

附序

詩類

芭蕉翁金像贊

贊雪中柳

詠懸松詩

戲俄道心詞

謝贈菊紙人

右五首有東華坊作而

灯花詩最之再撰也

真名詩類

雜題

和栗山氏詩

贊秋風像

戲影法師

謝初茄子

蒲萄吸貝

用萬葉韻詩

甲辰歲旦

評筆

田家意

怨七夕意

老圃詞

祝竹筍

喜七夕晴

假名詩類

雜題

兼好贊 柳後園 昼寢

愛牡丹

詠梅 擬古

情小傾城

對花感老

民詞

賞

師走朝霞

松骨狩

戲花

笠

鏡岩詠四季

詠蓮

梅嫌

悼水國公

晚望

松讚 薊花 業平益贊 待石憲

寄餅意 批灯吟 四季詠

去者日疎 年賀 移舟遊覽

遊女泣老 恨別 呵猫首尾吟

兩月愛蝸牛 野馬贊 寄團扇意

謝鮭塩引詩 再和鮭詩

歌類

壽老人贊 小鍋歌 題不知

白髮吟 扇歌 辭世詞

佛奉養歌 挽歌 比丘尼曲

七夕姬和讚 讀法花經 茶歌

練漣歌

辭類

聖人無憂辭 及虫辭

感齒落辭

○卷之三

行類

連俳歌仙行 求韻短歌行

求韻歌仙行 雙六行 聯句行

聯類

大小聯

窗口聯

堪忍聯

鑑亭聯

五字聯

序類

奉珂億上人歌序

道遙遊序

文墨繪序 而物語序

愛石合序

○卷之四

表類

剃髮文

通夜物語表

教令類

廬山公九錫文

蒼巖再公九錫文

花剎札

極樂寺教

書快類

年始快

遺庄五郎書

配所返快

遺書

馬符文

申石谷十歲快

招隱文

谷五老并書

○卷之五

贊類

文探卷一

四季扇贊

團扇贊

福神贊

花生贊

之頌圖贊

醫贊

頌類

枚子頌

醋具頌

大振頌

辨類

之上辨

急掌辨

東桐辨

依志枕辨

說類

木履說

白杵說

眠五說

搔餅說

○卷之六

論類

法利論

園論

不掃地論

葛翁論

解類

長子解

昼而後解

歲類

摺小木歲

葭莩歲

生海鼠歲

猿歲

文探卷一

卷一

記類

紙盒記

何尾亭記

二方樓記

壺中園記

琴之菴記

〇卷之七

銘類

鏗塔銘

甄銘

俎板銘

本箱銘

炭取甄銘

蠅打銘

洪笠銘

髮鏡銘

傳類

竹夫人傳

瓦器傳

築然傳

讀隱逸傳

帚傳

吊祭類

浪化公終栗記

雲鈴法師行狀記

祭之界万靈文

文操序同終

經世圖



和漢文操卷之一

賦類

三日月賦

管三品文時

瞻^ニ彼^ハ新^ク月^ヲ有^リ微^ク其^ル狀^ヲ攬^ル之^ヲ不^レ及^ス手^ニ交^ハ之^ヲ
光^ハ未^レ歸^ル仰^ク之^ヲ則^チ在^リ眸^ニ纖^ク々^ノ之^ヲ所^レ見^ル可^ク如^ク玉^ノ若^シ乃^チ
風^ハ吟^ク中^ニ秋^ニ月^ハ沉^ム西^ニ海^ニ伴^リ星^ヲ榆^ノ兮^ハ影^ヲ因^テ茲^ニ
而^シ見^ル隨^テ曆^ヲ英^ヲ兮^ハ孤^ク坐^ス於^テ是^ニ半^ク在^リ觀^ル其^ノ以^テ陰^ヲ
互^ニ位^ト成^ス象^ヲ於^テ天^ニ彼^レ合^シ璧^ノ之^ヲ有^リ始^ト諒^ヲ推^テ輪^ヲ于

文操卷一

十一

向前。德也不孤。暗知珠珀之未實。物也。有
漸。豫驗金魄於將圓。及夫影倒秋江之浦。
光傾暮山之巔。遊魚疑沉。鉤於碧浪。旅雁
驚。虛弓於紫烟。矧夫高秋易感。良夜未眠。
窺仙娥之容輝。尚秘綽約。訝靜女之眉態。
空迷蟬蛸。士有一出董帷之內。再拜塵榻
之西。慮乾盈之所。其慎終如始。悟忌滿之
可法。見賢思齊。摘怪攀挂枝於暮秋。獨
遑而悽悽。齊約

○評云此賦者在。本朝文粹。而為題。織月賦。共
今。有和。二日月之字。而所成。此文探之
卷頭。官家者。我朝之博士。而為文章。家之
祖。則也是。以評此文。則文字者。字諸越之
姿。共文。賦者。運大和之情。而多用之日月
之和。訓了。共。叛作者之本懷。間敷哉。誠可
恐者。此賦之評也。乎。此故不註。文中之故
事。古語。例。將。後君之。沙汰。與也。但謂。此
賦之。增。則。以。望。在天。西。易。溪。解。虫。先。齊。之。四
韻。歷。在。有。者。除。六。取。之。發。語。而。以。之。十。八
句。成。十。九。章。以。二。百。十。二。字。成。一。篇。止。矣
然。則。可。以。自。角。知。韻。礎。以。黑。圈。知。發。語。也

大探卷一

中發語也

全篇論者謂四六之文法一也

按此文章二句讀ノ其ハ文鑑ノ序ニ細論アリテ
假名ニハ漢土ノ式ヲ居キテ句ヲ先ニ讀ラ後ニ句ハ
旁ニ点シ讀ハ中ニ点ス去ルハ句ニ讀ルモ二句一讀
ナルモ二句四句ヲ合テ一章ト云ハシ和訓ハ長短ノ違
ハハ倭ニ其論モ尤ト云ハシ然レモ後勅ニ評ハ漢文ハ
讀ラ先ニ点シ句ヲ後ニ点ス古ハ讀トハ誦時ノ息
續ニシテ其次ヲ誦ハ埒ノ明ク故ニ先後ヲ合セテ一句ト
云リ先後ハ但シ漢式シ是ト云ハシ去レモ漢ノ校書式
ニ讀ハ中ニ打テサレヌ句ハ旁ニ打テサルトヤ物
中ヲ隔テサレヌト云フ當然ノ理ハ明ラメ難シ然ラハ知
ノ文式ニハ讀ハ旁ニ点シ句ハ中ニ点スキヤ但シ漢文

ノ法ニ任セテ道理ナキ故實ニ隨キヤ故ニ賦ノ点ハ古來
ノ法ヲ得リテ暫ク漢ノ校書式ニ隨フ月見賦ハ倭文
ノ新式ナシ讀ハ旁ニ点シ句ハ中ニ点スル等ヲ和漢ノ
意地ト知キナリ或ハ發語ニモ返辭ニ讀ハ旁ニ
ツケタスハ例ニ倭文ノ新式ニシテ誦ム時ニ長短ノ埒
ナレハ一部ハ總テ之月見賦ト月見賦トノ句讀ヲ見テ
旁中ノ点ノ差別ヲ知キナリ

月夜賦

兼好僧於

おとらふりし月とて海をさよふらん
おとらふりし月とて海をさよふらん

そつこつとやきよりのうたへきれ

○評云は脚をほれく竹よるまき月花の段の終り文
ありまよるる命をたふさくと評さるる好く好色の一段
より月花の段も非の段もすして大福者の
段あり或は俗俗のふゆとせしむ或は男女の
愛をよといふものにあつて儒師と難物して
兼好一流の達論なりとむしう今の注者達ハ釈迦
孔子の勸懲としおあふの注され十六折ハ枚子
と定規をんと先師のほれくの讃ハは論ありおれ
ハ今ハ月花の段も論議のつる視觀をよして
月としてほれくと視る人と終る兼好の安^{ニル}と
らう一誠ハほれくめさ地とらやと色と勸とく色と

懲らし是とよほりいへ非とらうみとこやせくと世評の
荷擔^{カタク}しては脚と身二段もせざる也次ハ下下の官名を
園太磨の勅謚なりと菅家のこと品ハ對とむしと以後
の傍於と称えとらうはまた選場の傍ハ子ハ

月見賦

芭蕉翁

こゝみおほせ湖の月をむしとらうまらるるあまのよ
きひを捧いで。膳所おぢのくくと信をほし初と
酒とまらるる。泉川よるあふとほく。西の茶
とほく。信^{シヤウキ}系ハ一おのまるとはやうらうあふ

香^{さか}る^るい^い酒^{しゆ}い^いか^かあ^あの^の人^{ひと}は^は流^{なが}る^るな^なり。酒^{しゆ}を^を
 灯^{あかり}も^もく^くぬ^ぬお^おて。こ^この^の事^{こと}も^も玉^{たま}川^{がは}の^の歌^{うた}と^と流^{なが}る^る。又^{また}竹^{たけ}を^を
 月^{つき}も^もく^くぬ^ぬお^おて。こ^この^の酒^{しゆ}も^も樂^{たの}み^また^たに^にた^たま^まり^りぬ^ぬと^とも^もう^う
 こ^この^の事^{こと}も^も本^{ほん}節^{せつ}と^とを^をい^いは^はす。若^{わか}月^{つき}を^をお^おの^のち^ちに^にた^たま^まる^るあ^あら^ら
 か^かつ^つま^まの^のあ^あま^まな^なも^も浮^うき^きあ^あり^りと^とも^もな^なれ^れ中^{なか}は^は恒^こ恒^こは^は年^{ねん}
 酒^{しゆ}も^もか^から^らぬ^ぬも^もう^う業^{わざ}も^も感^かん^ん。お^おも^もい^いし^しも^もこ^この^の事^{こと}も^もう^う
 以^{もつ}て^て。ま^まに^にこ^この^の事^{こと}も^もこ^この^の志^{こころざし}と^とも^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の
 の^のか^から^らぬ^ぬも^もう^う業^{わざ}も^も感^かん^ん。我^{われ}も^も年^{ねん}の^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の
 飲^の中^{ちゆう}に^にお^おの^のち^ちに^にた^たま^まる^るあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の
 と^とは^はく^くら^らぬ^ぬも^もう^う業^{わざ}も^も感^かん^ん。我^{われ}も^も年^{ねん}の^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の

さ^さか^かし^しも^もこ^この^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の

来^きぬ^ぬお^おな^なと^とこ^この^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の

か^かく^くら^らぬ^ぬも^もう^う業^{わざ}も^も感^かん^ん。我^{われ}も^も年^{ねん}の^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の
 お^おの^のち^ちに^にた^たま^まる^るあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の
 ぶ^ぶき^きも^もう^う業^{わざ}も^も感^かん^ん。我^{われ}も^も年^{ねん}の^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の
 こ^この^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の
 あ^あら^らぬ^ぬも^もう^う業^{わざ}も^も感^かん^ん。我^{われ}も^も年^{ねん}の^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の
 松^{まつ}も^もう^う業^{わざ}も^も感^かん^ん。我^{われ}も^も年^{ねん}の^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の
 う^うら^らぬ^ぬも^もう^う業^{わざ}も^も感^かん^ん。我^{われ}も^も年^{ねん}の^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の事^{こと}も^もあ^あら^らぬ^ぬや。ま^まに^にま^まの^の

の風をくくなく。北とよ。楓橋のおおしきまわらん。矢橋の
帰帆と。と名月とりてあそぶ。いづれか舟一

名月や湖のうしろの七曲

はね。我舟の常式郡と。石山は海舟のねんを
ふり。唐國の藤屋士と。西湖は越すのうしろ
とそとよ。いづれも風帆のうしろ。今や舟の
うしろんや。うしろも和溪の名跡ありき。はて
本意は船と。は。うしろ。葉底の欄干よ。とこ
い。月と。うしろ。蓬萊のねとる。うしろ。うしろ。うしろ。

の春と。うしろ。うしろ。竹の林の海は。うしろ。た。うしろの
うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。
の春と。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。
尾の川。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。
うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。

と井き。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。

津。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。
うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。
うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。
うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。うしろ。

赤碓の志後とよき。その地よは人とたふしむるや。
足ぬりぬる。とおのりりり。とるわのり後とあら
きふちとに月とちち等。らのあつらふらぬ

○註曰。本朝各蹤志近江、因湖水志其形を似比習之。按を
てふ木曾寺上木曾塚ノ系仲寺ヲ摘テ其各ノ風流ヲ残
シ玉川ニヤ其地ハ祖翁ノ廟取ナリ ○百人ニそらぬ
こととては、いふ川、いふこととて、あつらふらぬ。按を
これ、名上ハ大澤ニ泉屋ト云ル酒家アリテ之、泉ト云フ各酒
ヨリ往來ノ騷人モ其各ニ詩歌ヲ残セリトシ、信樂ハ近江ニ
シテ政所ト云ル系ノ名取ナリ ○玉川ハ盧仝カ標ナリナリ
茶歌ハ奉ルニ級系ト、泉夫カ詩ハ自中々佳キニ在テ多ハ酒ノ

稱義ナリ △線中、尼のよとそ、向し中くおち浮ひく
あ、おろくをきく、いふ、あ、い、
ハ文 △論語、先進、三子有之、言何如、子曰、亦各言其志、
也已矣、抑之、之、列以下、八所、これ、の、弟子、解ナリ、此、故、也、
ハ二子、一言、三人、生、竹、見、字、テ、惟、然、法、師、ト、評、至、テ、八、空、ニ、凡
吹、テ、ト、言、捨、タ、ル、春、秋、ニ、ウ、子、ノ、勸、懲、ハ、知、ラ、ス、又、ハ、隱、見、ノ
絶、物、ト、稱、ス、レ、
▲列子ニ、伯牙ト子期ト、知音ノ石アリ、峩々
洋々ハ、琴、中、ノ、趣、ナリ、●杜詩、飲中八仙ノ歌アリ、總テ、高、名
ノ、風、人、ナリ、奉、ル、ニ、級、系、レ、△唐、れ、く、竹、ニ、よ、く、な、と、あり、一、つ、を
お、ろ、く、な、ニ、つ、と、く、く、く、一、つ、を、知、る、者、あ、る、な、い、○事、好、
ま、す、こ、の、中、の、浮、世、あ、り、ま、り、よ、お、ろ、く、と、い、か、し、め、
の、中、の、う、れ、
▲繪本抄ニ、李白、滝見ノ圖アリ、在、流、ニ、千、尺

ノ詩ニ類レリトシ△穩東坡赤壁賦有客無酒有酒
 漁有或曰吳子細得魚快如松江之鱸或曰我有牛酒
 待不時之需云云按スニ此賦ハ正前後赤壁ヲ取合セテ
 多ハ古語ノ裁入ナリ以下ノ相紋ハ多ニ見ルレ○躬恒有
 多ク也云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
 の月●ニ賦詩楓橋後泊月落鳥啼霜滿天按スレ
 ニ鏡山以下ニ多ク湖上ノ八景ヲ奉スニ屏帷ハ今霄銀食
 ニ似タリトハ此等ヲ結前ノ絶妙ト稱スレ七也田ノ古又諸抄
 ニ此名アリテ細考スニ及ハス也田カ一生ノ盛衰ヲ云下ニ按スレニ
 此後句ハ東坡ヲ西湖ノ詩情ヲ含シ源氏供養良ノ風情寄
 セテ月ノ艶色ヲ形容セル源字ハ鎖詞ノ絶妙ト稱スレ
 ▲此系式部ハ源中ノ趨向ヲ新トテ石山ニ卷ニ毫シテ六十

帖ノ面影ヲ字セリトシ●穩居士ト東坡より西湖詩若
 把西湖比西湖淡粧濃抹兩相宜按スレニ此一對式部
 ニ居士ノ官名ト云イ源氏ニ越女ノ字美ト云イ此等
 ヲ俳諧ノ筆格ニシテ和漢ニ意對ノ絶妙ト稱スレ
 ▲神仙傳ニ蓬萊之地隔弱水不堪泛羽毛漢武故言又
 致美芙蓉掌露仙術ヲ字フ也又ナリ▲竹林ハ七言
 ノ高トナリ細考スニ及ハス按スレニ竹林ハ酒ニ竹葉ノ響
 ヲリトテ亮ハ酒ノ枕詞トモ云ハシ増シテ此對ノ短筒ナカラ赤壁
 ノ兩語ヲ裁入テ文ニ錯綜ノ絶妙ト稱スレ○抑リ音音
 云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
 ●詩格高實嶼騎野得句身夜他中樹僧鼓月下
 推鼓未定引手作推鼓執時衝至韓愈行隊鳴

見道所得愈曰敲字佳並書歸為布衣文云
 ○評云此賦をえ録の始なり湖南の幻住庵の山陰の時祖
 とし作し文章の浮論ありて假名を真名の通用より
 能得の字の筆格と違へきと百練千鍛の斧と加て
 祖を日月脚と四六の法とやうけを作し文脚と五條
 の式と供ふらうと百世の家訓ありて下下の能得入
 じりやとあられて柳子庵の遺稿と十龍とありきと
 中野文鑑と支とくひとくひとと手紙老人の祝詞と
 敵とく所と種んともふ似てんとも既望賦の述云あり
 也と對もをれらと選場の心持ありて百世と文鑑の
 時更しくいふとあらうとの更加くらしむや文孫の
 中懐とくふとをたえらうと若家の賦とくひ假名

ハ兼好の文と對しきと文章の博まりては和
 真名の神とあかくなくこころこゝろの風雅の思ありて
 一たのこゝろ地の所とあをこゝろと二の節と評と我
 家の評笑しとやいれいあありて温ぬの辞道
 て一部の評よりなりてやう月久脚と假名の百世各
 ちりとちり文脚と真名の假名ちりとちり電脚の
 二履の文對ありて和漢と文と標とくひ標題
 の心とくひるるる也洋とけ脚の婉辭ありてと心
 談笑の自在ちりたこと我家の筆格ありて文章いり
 五箇の絶妙と感却とて一也故と脚とくひ可讀と我家
 の式とくひら文脚とくひ即語の関とくひ一節の
 新制とくひ二の節とくひるるる也

香見賦

籥乙子

十月北風吹来月あもし風をとおろめゆる月
 ひろくは舟と火燈の小葉鑿とゆらふなまこり
 空葉のりこまるおちらと神らうお津とわさそ
 葉敷くわらう落みおとわさそなたりしおんたれ
 きり常とおまの神より庭とんやうしあははる香
 ろしあめらう遠い揺るかむとわさそあはるこり
 今さらおのほくかたしあうし又舟とこりしあはる
 しきよめあめあにやとあうきあはるめあはるこり

あそびしこり人いふれせきとく香燈の筆に心席と揺
 るるとんさしあはるあはるいふかめあはるお
 の香に十船の揺おとほきるあめし魚はあてね
 さむしんさやせらふあめし平舟漫地のあをんとむ
 と世之國川、船と浮らるに錦城の二舟吹とほし
 あもし中にほ火燈の葉物にんく香の文日よかあは
 籥子のひむくし純子の花ら色しあそその扇のふ
 ともあねあうい月もあはるああむむ陶朱るる船
 葉さし又湖のああしよあはる人そ我のあはるかく
 うんた。越すのね裾も燕姫の舞舞しこりあはる

ぬあふいめんはて種多の木の香と仰ぐいとや
 てららるるもくくをよのいとやうせい思ゆか様と
 互梳のふありて知とおもむるをさういける盛やう
 と舳とよまておととよのふとやと小盛のたよ
 月窓さるの入およけなまるとやむとらりせ

○註曰此詞鉢木ノ謡ヲ世ニ在ル今ヲ羨合様之●香極出峯重
 白居易カ詩清女納言カ枕竹帚ニ漏ラ接タレ御アリ
 ▲晋子歎居山陰雪夜乘小船而訪載遠造行不前
 区曰重負而來魚尽而帰 ●錦城ハ放公羽カ詩ニアリ蜀
 成都ニ歌舞ノ地也▲まらるの園ハ眞竹在リ漢末ハ名社ノ

假訓ナリ▲越史云いさ出滅吳後取西施遊五湖不返也●杜律
 越女紅裙濕越姬翠黛眉愁接也此詩ハ妓女ト舳遊ノ凡情
 ナル今ノ雪見舟ニ結也▲經國筆下ニ四野ノ印ハ國川ノ各町ナリ
 ○浮云け賦ハ例の流階ナリ月見ノ父ハの對ナリ一カノ
 月賦の婉靡ちりこに雪賦の虚誕ちり又操ハハニ雪柳
 此門の虚實とまれとやん接するに賦賦ハ瀏亮とい
 婉靡といハおほくと文句と對もへなれと浮も柔玉
 好色賦のこまき文とる体ナ格ナリこれノ二辨ハ
 ちりしむじと月雪の二賦とあるをくら色例ノ文操此
 夜とらるハ月賦と文賦とに假名有は各の通用とまると
 け賦ハ賦中の婉曲ちりとまると鑑乙子と定師の流階
 乙と此の角の兼取とらるハ賦の文章と操ハハ

文賦

東蒼坊

天地開初而後万物自有聲而從其聲之
分音其音之調韻身歎者啼而知哀樂兮
草木者鳴而見榮枯兮增而人間之委敷
其言橋懸不及雲而汲野中之水心則通
馳男女之情兮和發神佛之心兮雨有而
社言葉者不斷綴而曰文曰章也了春鳥
之嘒雨苦不乾則梅之花兮寄歌人之詞
兮秋虫之鳴兮幾利波多則紅葉之錦盡織

姬之手兮皆只聞其物之其色而人之以
筆被文成也鼻抑謂文章之要者物有姿
情之二而情者一樣古今也共姿者万別
日夜也則興詩兮和歌兮物成連作之四
而詠芳野之花於白雲兮喻更科之月於
團扇兮總而不言端之文欵者左有則月
花之情逆有孰所可求情季月者惜山端
之傾月兮花者歎木間之散花兮惜姿者
万別也共歎情者一樣也也爾有則學文
章人廢改次女之今古了共不溫情之新故

文賦卷一

二十七

了哉。今恠見。陰。杖。之。文。賦。了。則。為。其。體。也。
屢。遷。為。其。意。也。可。巧。與。者。我。副。乍。謂。文。體。
之。變。思。違。詞。之。巧。而。所。謂。意。之。巧。亦。哉。但。
者。從。博。學。之。惑。失。恒。心。而。不。知。次。女。之。為。變。
化。花。鳥。了。共。情。之。為。不。易。月。雪。手。麼。次。女。者。
似。山。而。條。易。春。秋。了。情。者。如。水。而。不。言。畫。
夜。了。尤。許。有。和。漢。之。違。則。今。者。論。次。女。情。之。
先。後。而。新。可。建。俳。諧。之。筆。格。與。也。尤。在。則。
謂。詞。之。巧。者。春。者。楊。柳。之。假。風。而。條。空。于。
雲。雀。之。氣。色。了。夏。者。葛。蒲。之。濺。雨。而。待。雷。

于。郭。公。之。初。音。了。厚。啼。于。菊。秋。之。夕。曾。了。
雪。降。于。松。冬。之。曙。明。了。漆。四。季。折。々。之。文。
而。令。遊。蛙。於。硯。水。了。為。鳴。掌。於。筆。林。了。詞。
者。為。濱。之。真。砂。摩。哉。斯。者。天。地。之。誨。人。而。
使。人。鳴。之。了。則。其。声。分。儒。佛。之。文。而。五。絃。
之。琴。尔。者。解。庶。民。之。愠。了。六。時。之。鐘。尔。者。
覺。衆。生。之。眠。了。迦。葉。之。舞。麼。子。游。之。歌。麼。
增。而。我。朝。之。神。樂。尔。者。乍。雞。天。扉。之。明。人。
面。之。白。鳥。則。竹。木。麼。靡。而。無。音。于。凡。了。鶴。
龜。麼。舞。而。有。色。于。雲。了。皆。是。為。家。々。之。秘。

曲則遠者以斯文調四民些近者以斯文
 和五倫乘天不喪斯文作者詩歌者增而
 連佛之人麼道知文章之有天理了哉抑
 謂詩歌之用者令物言非情之草木而字
 出其物之姿則身麼分和漢之文而諸越
 之詩亦者啼提胡蘆兮大和之歌亦者轉
 糊摺了兮櫻之與雪敵日亦麼拍之兼雨
 降夜止麼神鳴于雲兮木枯于風兮實夫
 荻菽之有聲麼人之音信而為文兮爾又
 蝶鳥之無心麼筆之物言則成章兮孰若

觸其時之折則何款者不哀矣詩歌者可
 知文章之老也其詩也有杜陵兮李白則
 其歌也有定家兮家隆而今者成連佛之
 四了則連歌者令含鳥玉之凡情兮俳諧
 者所寫素顏之凡姿兮危程有眾々之意
 地共論則姿情之先後而已也其外者
 稍流系竹之又而之線之噪亦者令後於
 佛仁乎兮尺八之哀亦者使注於鬼靡毛
 兮夫尚不言韻之文款者况隔玉之翠簾
 而通馳心於琴音栗者色好人之文憎也

則位麼。笑麼。心之隔。而總而不文章之哀
怨。季耶。然共深。硯干筆。而充了。謂文章時
者。我家製。五條之法。而一篇之趣。向者不
及言。才一有言。語之虛實。才二有文。句之
起結。才之有句。讀之長短。乍充有。此之者
文章家之通法。而和漢有。齊痕了。則今更
不及。新其。記止。才四有假名。真名之配者
譬。則如。謂。掌。轉。梅。真名者。返而有。語之間
共假名者。直地。讀下。而將為。書。續。掌。梅者
字面之配。麼。不。大。和。掌者。梅。共。掌。之。梅。共。

多。加。與。用。之。手。亦。遠。波。而。助。語。亦。者。知。有
無。用。之。用。了。哉。才。五。有。俳。諧。之。筆。格。者。譬
則。將。謂。人。之。奸。醜。連。所。謂。莊。子。之。厲。與。施
奸。醜。者。連。歌。之。文。法。而。厲。施。者。俳。諧。之。筆
格。也。斯。構。文。章。之。家。而。為。宗。言。語。之。姿。者
情。無。新。古。之。詮。美。了。則。將。殊。儒。佛。之。教。誡
為。也。假。令。以。和。歌。連。奇。之。曲。玄。同。出。於。蒼
了。浦。山。於。鳥。了。憐。霞。了。悲。露。了。一。首。動。天
地。共。不。所。聞。矣。平。之。藏。之。耳。矣。則。有。難。立
町。人。百。姓。之。用。矣。雅。言。麼。俗。語。麼。為。人。之

日用厚哉。率哉謂俳諧之法。乃者史記有
 談笑之贊。而自在言語之虛實也。則乍月
 入兮乍龜出兮。歷於猛來武士之心兮。悅
 于早敷木樵之耳兮。諫君宥父。余麼其詞
 之。不比于其行之。不伯夷兮。乍遊酒色
 之中。遜言而撓其人。了則更不及。儒佛之
 太。後從和歌麼。從連歌麼。凡雅者。以俳諧
 之文章。可寫於花鳥之情。了則可達於樽
 塩之用矣。夫今也。稱白馬之文章。訓則引
 古草紙之美。人揃而所書。繁式部。小式部

鬼之娘之十郎。娘小野小町之君盛者。二
 對。變言語之虛實。居四句調文句之長短。
 歷斯所學。文章人者。此等。十年之眼。而
 可見。千糸一斬之功。與所諾。那評。此文之
 巧。則起何條。無事短對。而和鬼神之娘。於
 十郎之名。却斷百歲之姥。於若盛之詞。了
 才一之虛實者。例之不言。每篇之法。格麼
 在茲。則每章之起結。麼在茲。而凡雅之淋
 敷。見麼俳諧之面。通去麼。皆々不在茲。要
 耶。然則以故翁之一言。百世成文章之鑑。

則次女情者隨_レ花身之時而虛實者可以_レ心傳_レ心自_レ公矣

○註曰_レ詠_レ文_レ單_レ出_レ為_レ聲_レ成_レ文_レ為_レ音_レ音_レ實_レ為_レ韻_レ按_レ之_レ韻_レ實_レ合_レハ_レア_レイ_レウ_レハ_レノ_レ五_レヨ_レリ_レ喜_レ怒_レヲ_レ知_レリ_レ節_レ早_レヲ_レ合_レツ_レ詞_レ内_レノ_レ舞_レ韻_レヲ_レ云_レリ_レ ○奇_レ林_レ良_レ材_レ一_レの_レ中_レの_レ度_レ水_レや_レら_レれ_レり_レの_レ心_レと_レま_レる_レく_レむ_レ能_レ因_レ奇_レ松_レ之_レ中_レの_レは_レ水_レと_レら_レぬ_レの_レ妻_レと_レり_レる_レも_レ△古_レ今_レ序_レち_レる_レも_レこれ_レも_レ△云_レ地_レと_レ奇_レ一_レ同_レと_レら_レぬ_レ思_レ非_レと_レあ_レれ_レと_レり_レも_レ男_レ女_レの中_レと_レら_レぬ_レけ_レを_レけ_レお_レり_レの_レゆ_レめ_レ心_レと_レあ_レく_レさ_レむ_レい_レの_レあり_レの_レ按_レ之_レ世_レ賦_レは_レけ_レ序_レノ_レ取_レ意_レ數_レ多_レク_レり_レ相_レ效_レノ_レ下_レニ_レ見_レ合_レス_レ也_レ △八_レ美_レ詠_レ文_レ掌_レハ_レ雨_レヲ_レ愁_レル_レ身_レヲ_レ雨_レ苦_レ不_レ乾_レ

ト和訓スト古今ノ物各ニ其歌アリ ○古_レと_レ實_レ公_レその_レの_レま_レら_レぬ_レゆ_レめ_レ心_レと_レあ_レく_レさ_レむ_レい_レの_レあり_レの_レ按_レ之_レ世_レ賦_レは_レけ_レ序_レノ_レ取_レ意_レ數_レ多_レク_レり_レ相_レ效_レノ_レ下_レニ_レ見_レ合_レス_レ也_レ △八_レ美_レ詠_レ文_レ掌_レハ_レ雨_レヲ_レ愁_レル_レ身_レヲ_レ雨_レ苦_レ不_レ乾_レ

又亦化スレ似タ下流テ元ノ水ニ故ニ情ノ不変ニ喩フ然レニ
昼夜ノ言語ヲ假テ春秋ノ和訓ニ對シタル和漢ニ意對ノ
絶妙ト稱スシ ○伊勢物語「ついでに系のむはくちあれ
と玉の海邊へささくさうに流
△古今集むらさき
水ささくむ鼓のやとまげのきくさくさくものつれさうと
下中らりきる△歌詞書「言ふと漢のまゆいさくさくして
ちくちくの流きくまわりのりり △聲文「維天之於時
也亦然「扱其善鳴者而假之鳴」採スレ此二句ハ此等
ノ文勢ヲ假ルニヤ ●袁詒舜「彈五絃之琴「採南風詩曰
南風之薰兮可以解吾民之愠兮」△仏經「祇園精舍
ノ無常院ニ六時ノ鐘ヲ鳴シテ^ル如恨ノ眠ヲ醒ススト云一り
▲大論「乾達婆王奏樂四葉同「筆起舞」ト一り▲史記

子游「武城ノ宰ト為テ百姓ニ教テ絃歌セシラ孔子ノ笑ヒ至
ル有アリ▲神樂ニ面白ク又ハ日本紀ニ在リ奉ルニ及ハス論語
天ノ未喪「斯文也」匡人其如子何 ●山谷會語詩註
脱却布袴ト啼息アリ提胡蘆沽美酒ト啼息アリ何レモ
詩人ノ寄言ナリ然レニ大和ノ俗談ニ鞠措了スホソホト啼息
アリテ鳩トモ木卷トモ云一り明日ノ日和ヲ定ル声トシテ詩歌ハ
又ノ節ナリ△ほれく竹四季結段「折るあれん河のありれ
ちやん」とあり △我家五條ト「世雀云羽白馬經
文章訓ト云ク教誡訓ト云レ兩訓ノ差別アリテ道ニ文教ノ
二法アリ其中ニ二言備ノ趣向トハ儒仏を在ノ經書ヨリ詩歌
連條ノ文章トテモ趣向ニ執中ノ法アリテ一部ノ始ト終トヲ
調フニ等曲ハ其註見レ但レ才四才五ノ評ハ此賦ニ先師

のほしきあんな和詞の新製ありて又條のほしき
詠文さしに等書物流のほしき遠波をほして
俗詠の舞乃而為舞ニフテ。のほしきも漢家の
字美といふまありて一語のほしきとてねなる
よりあれとて副假名とりも及かりとせよとて
賦の太騷ちるむおのほしき名の體觸とてあり
ほらくけ賦の次第とてらりに始とて声七言
韻の真全とてありとてついでに陰接とて賦
と敵とて教誡とてほのほしきとていふ文章と
漢のほしきとてついでに儒師のほしきとて
連流の建流とてあんな終とて白馬とていふ
百やとて文章の體とてふとていふ速而不作速レテの辭を

のほしきや二對とて和漢の文法とてちきり能體の
筆格とてちきりとていふ

差賦

山岸昨裏

いふと本と案くいふと元ありて人とも賦の
ほのほしきとてタラキホラヒ置帆の種とてやけ
けいさといふりおひるるとまのまゝとてぬとてぬと
へ天の流ちありきりそめちせとておぬきありて
たさの伴達とていふりおぬきとてぬとてぬと
まのまゝとてぬとてぬとてぬとてぬとてぬと

○註目▲文選序冬を元夏を元の古又記二平置帆負ノ神ヲシテ
 始テミシ造シメ玉フトアリ ○仲九考ニ天の帛ゆりさけ
 んれおらちりこまの山くちりも○古今集
 みさあいのかごとくトセみやをけのあのとあゝあゝ
 れり ▲東坡カ雪見圖ハ張益ヲ着テ野馬ニ騎リ多ク
 竹林ノ様ナリ ▲浮世又兵衛ハ大津繪ノ元祖ナリ 浮世の立ニ藤
 ヲ被キタルヲ其中ノ名物トセリ 按ニ此對以下ハ文ニ長短
 ヲ尽セル中ニ近江ト加賀トニ古今ヲ對シテ躍ヲ躍リ註ヲ
 謡フトハ倭文ニ字對ノ絶妙ト稱スシ ▲論語女子與
 ハ人互難養也近之則不遜遠之則怨註臣妾也
 △宋玉賦ハ文選ニ在リ 按ニ其賦ハ三ノ所決ハ無ニ好色
 ニ子ニ賦ノ一子ヲ寄セテ和漢ノ證文ヲ結語セリ

○海云い賦ハ婉靡の比ふる例ハ沈潜の事格とさすも格取
 い事の子より世々の名と形容して月もも威光
 とあふらひらるまると詠答の汎濂と格と一作答ハ
 前代もよ好名ありし今世又操しよ事ありしありと
 市おらるるあゝ常にや村の志と美らと斜や涯の
 こ子と顔し行下能遊の志とまおれあつとせ

豆腐賦

北七里

食ふ物ありしはかきらとに角よりしてそのたのほるれ
 秋のおきと目れるるやむい 淮南王の命を位
 しあるおの小嶋をていふりけ物とゆふのい今

唐の心大和の心[△]美羅流よりひろがりて金殿玉樓
 玉はく[△]空の勅名をかむりて[△]海のおもふ[△]人
 む[△]毛[△]依[△]雪の味[△]の連[△]音[△]神と[△]か[△]し[△]と[△]ら[△]と
 神園の境[△]は[△]く[△]い[△]く[△]を[△]抽[△]の[△]あ[△]ら[△]い[△]と[△]り[△]は[△]け
 くり[△]を[△]播[△]の[△]神[△]の[△]う[△]つ[△]り[△]も[△]今[△]を[△]あ[△]ら[△]た[△]の[△]お[△]も[△]よ[△]ゆ[△]ら
[△]美[△]舟[△]一[△]ま[△]ま[△]良[△]の[△]お[△]よ[△]る[△]田[△]東[△]江[△]神[△]と[△]く[△]あ[△]ら[△]れ[△]て[△]言
 待[△]詔[△]の[△]縁[△]あ[△]ら[△]う[△]念[△]仰[△]備[△]の[△]お[△]合[△]ら[△]ら[△]一[△]蓮[△]控[△]の
 某[△]殿[△]よ[△]も[△]あ[△]ら[△]う[△]り[△]佛[△]家[△]よ[△]も[△]南[△]禅[△]寺[△]あ[△]ら[△]う[△]
 武[△]行[△]よ[△]ら[△]も[△]言[△]事[△]あ[△]り[△]て[△]宰[△]人[△]の[△]治[△]部[△]と[△]名[△]の

温[△]純[△]も[△]も[△]會[△]て[△]腹[△]ハ[△]益[△]の[△]名[△]類[△]ち[△]り[△]一[△]は[△]れ[△]れ[△]を[△]也
 い[△]鎌[△]倉[△]の[△]名[△]よ[△]か[△]ま[△]も[△]と[△]松[△]の[△]い[△]と[△]越[△]後[△]の[△]き[△]ら[△]ら[△]や
 を[△]離[△]く[△]ア[△]と[△]り[△]い[△]手[△]の[△]い[△]ま[△]と[△]い[△]の[△]油[△]揚[△]の[△]類
 い[△]は[△]り[△]也[△]献[△]さ[△]り[△]て[△]海[△]橋[△]味[△]の[△]い[△]は[△]所[△]の[△]物[△]あ[△]ら[△]う
 ち[△]り[△]一[△]ま[△]ら[△]ら[△]い[△]の[△]類[△]と[△]る[△]と[△]我[△]所[△]の[△]お[△]説[△]い[△]ら[△]う
 ち[△]り[△]て[△]海[△]川[△]の[△]名[△]よ[△]ひ[△]ま[△]ら[△]ら[△]い[△]ち[△]り[△]一[△]は[△]れ[△]れ[△]を[△]也
 の[△]あ[△]ら[△]う[△]い[△]は[△]り[△]也[△]聲[△]の[△]い[△]は[△]ら[△]ら[△]い[△]と[△]神[△]院
 場[△]と[△]も[△]あ[△]ら[△]う[△]と[△]ら[△]く[△]わ[△]り[△]も[△]用[△]ひ[△]も[△]い[△]ら[△]う[△]て
 け[△]ら[△]う[△]も[△]い[△]は[△]り[△]也[△]唐[△]幸[△]の[△]神[△]と[△]ら[△]ら[△]い[△]も[△]あ[△]ら[△]う[△]
 ぬ[△]唐[△]の[△]は[△]月[△]よ[△]る[△]お[△]田[△]川[△]よ[△]も[△]い[△]ら[△]う[△]も[△]た[△]か[△]ら[△]う[△]と

好豆腐と云ふ物なるを時めは命せよとの世
我々の世の物と酒してをれらの地極より
これの世より亂詞と云ふてひてみせの歌とほくら
鑑まればけらに世と〇一野と我とん様
存ゆふぬとくぬのあふとくぬとくぬとくぬ
存ゆふぬとくぬのあふとくぬとくぬとくぬ

〇註曰淮南王始制豆腐出于南陽雜俎△本朝ノ諺ニ
隱え豆腐も隱え餅も此類ノ名同多し〇和漢通稱
ト知キナリ ○古今集に橘の香とわげんむしの
人の神のまゝしるる ▲青丹者トハ歌ニ誦テ亦亦良ノ枕詞

ナリ然ニ田手トハ奉良ノ奉ニ黄衣ノ法師ノ棒ニ登テ躍ル
時ノ形容トシ △狂言綺語ノ厭モ讚佛衆ノ縁ト云ハ
礼讃ノ詞ナリ △孟子君子遠庖厨△論語割雞用
牛ノ刀搯スニ此ニ句ハ料理場ノ古語ヲ假テ例を律ト見
キナリ ○古今集秋の中ノ新田川ノ流りしおとよ
ハ帝のは自よ錦とんのみ △国語巻第章既成撮其
大要以爲亂辭樂記古賦亂曰皆自來章也註
亂理也總理一賦之終云
空豆腐ハ仙洞ノ秘名ナリ空豆汁ヲ以テ終日ニ煮沸テ卵醬油
ニコ傳アリトソノ腫トハ豆腐ヲ崩レテ傳首首ニ卵ヲ加テ空
豆ノ殻ヲ摺テ銅板子ニスルヒ豆腐ノ煮ユル上ニテ温ハ然ハ
相圖ニ掛テ出ナリ搯スニ此ニ名ハ腫ノ音ニ歌人ヲ寄スルナリ

然雪三新古今論アリテ春氏云イ冬氏云ルニ季ノ成ラ云元
 ナリ又ニ筆名ノ絶妙ト稱スヘシ神園トハ菅田手ニ摺袖ト
 言ニキヲ散シテ串ナカク出スラ其各トセリ田手ハ味噌ヲ附
 ル時多ナリ青丹ト下ニ註アリ南禅寺ハ救豆腐ナリ菅田
 ニカランヲ加フ或ハ天山氏云リハ山ノ余トハ四角ニ切テ練甚
 ニ花鮭ヲ置置夏ナリ治部トハ焼立ノ豆腐ヲ生時油ニ入ル道
 然ラハ鋪ノ和訓ヲ用ケト治部ヲ宍人ノ名ニ寄セラ万葉ノ
 假名ヲ用タル又ニ寓言ノ絶妙ト稱スヘシ温能トハ美木ニ切テ
 煎將ニ鴨頭ヲ加フ多クハ餅大根新根添ナリハ五トハ鎮
 ノ料理ナリ將油一盃ニ水八盃入テ酒塩ノ加減アリ雪下トハ
 湯煮ノ豆腐ニ胡ハ味噌ヲ掛ケ椀ノ底成リテ其上ニ飯ヲ
 一枚子ク將テ出スナリ先ハ夜食限リト松山トハ焼豆腐ニ音

海苔ト口ヲ掛ル夏ナリ梅スニ歸倉ト越後一對ハ兼治
 我國ノ産カト云元作者ニ頌ノ節ト云ヘシ鰻崩ト摺物ノ類
 葛ト薯蕷トニ堅メテ練葛ニ山菜ヲ置ナリ鶴靴ト摺物
 ナリ松葉牛房ニ麻宜ヲ交セテ極ノ油ヲ揚ルハ糖味噌
 ハ白煮ノ豆腐ナリ子細ニ及ハス寺鱒トハ餅詰ノ名ニ油揚
 ラ串ニ刺シテ胡椒將油ノ附焼ナリ海鮭川鮭ノ郷音ト
 或ハ細ク切リ置テカラ生時油ニ居キラ散ラヌ魚造作ヲ
 用トセリ奴豆腐ハ天下ノ通稱ニテ今ノ註スヘシ及ハス梅スニ
 此奴ハ一篇ノ結語ナカラ又ニ寄セ武ニ寄セテ名整ノ産大
 ナル某野ヲ餅詰ノ談矣ト知レ況ヤ此賦ニハ十七種ノ名ト
 總テ料理ノ異名ヲ奉スニ結段ノ奴ニ至リテ豆腐ノニ
 字ヲ顯セル此等ヲ文ノ一躰ニテ法ニ懸輝ノ絶妙ト稱スヘシ

○漢云は賦と他語の字格より一とまれど抄の
ふと尋るに短語あり也語あれどおほく意
對とまるともやとらるる空の二子と起りて奴豆腐
のこまより猶いふん常山の蛇の傷ありといふ
りて又七の歌とより亂辭とふきりもろい漢
家と賦類と云ふりて和漢と自在とわたり
と云ふ一作者の前集と姓名あり鑑をたけ
ふ花をかりとせ

有磯賦 昇序

源源支

る源をむし大健宿林系持のこの國の守に

任されけ浦の遊のふとくは歌と越の山系と探
て詠弁のおもくれうもと万葉集とあつた
せそれより後人と書客しうたやとくし代と
はくり代との撰集と載とる也おる一賦と越
の名跡あり西と美傍傳多しといふ東と松崎源
のついでりておひおひ湖のい草とあつたけ浦
の産物とあつたまにそれらの年月とあつて
いふ一賦とるものかこの

せしつと一カ尋集集と弱あつていふとわらむと相
まらふと評集末とふと評一変とる強とよとるは

よ行く朝の歌音を海よりとまよふとまよふ
のひと白鳳年中いりけてもに美師吳場あり
らうらみすく水祓灯をの風静らして年越の
おの國とてらうとまよ密の水清りてと依のるに
喉といやもまよふたの山々の支祥もい洞家よ四の洞の
かまらりすくまを七きと伽藍とら國美もいむ
その氏の建まらうとて中良しに燈の光とほらふといつれ
禪家の名區せり神社を射水布勢か前代磯部
和泉の天満宮いおよの所とせりてまらりるをせよ
あり今田の虚空をを松木とありてく神植の名

よむけくも訪海野のねみ社宮の掃まのら
歌人の跡とほら入江のわらわと隠者のぬら
深ら出航入航の帆とくま吳東楚南の人ととら
かこにの州の津とまよと越と凡土の及と経とへ
氷の丘屋氷見杖板ハシナヨシ鼻曲ハナカマのふら
ふらうらうらとあくハシナヨシ飯親海舌和布うつ
貝とまよふとふたうくハシナヨシと一カ葉はらうら
山里のおまよふと葛葉イハナ論田箕早借道ハシロ指崎ササキ
女良メノラのた下い踏らまにあらく後よま王の厨とま
長坂の批味正の柿山のかまよと濱のまよと磯よ

八景

四景

ふはすのたをうて姓と原帯と子と入原の美記
より中子と原帯と一原支の但能各ありけり
了然斎といふそねの金きとてさるしつね
ふゆとの抄まゝありとせし

幻住庵賦

以四難坊

五十年やらむく力と茶椀の老ありあり
端牛のからとく一ふん葉の此とけり
り米あましく以中になまよかの糸澄うけ
おのろく一能圓の澄の袋とけりてねん

又面とく。原の法より袂とめんと
此の世陰のよりあやうく一故とん
よのいまけりと同し曾言なる
より一と神といふわのんさ
ふより熱法のわくよかむくはる
くるまわ海のある様よま
のちよりにきんふたの浮葉の信
此一まのんをよりとめく
そのいと國分とつり
六根とつりしはめ

柳はくり葉の糸をとまふてそと猪の懸けをたぐ
 はしゆね除る海業軍の飲ふも市にありし海軍
 く玉乃人々の層の筆の行のままと捨てしむむ
 へくも虚の上眼とひりて味をく戻顔のまじと
 柄てなもきよのくしよとやうちの時に新とまら
 清水とむもよ小菫乃おちるまのまじと捨てしむ
 ごとくお葉とこひてと一がのまじと捨てしむ
 けきのくははらふとひりて味をく戻顔のまじと
 あ一お師一向と捨てしむとまのまじと捨てしむ
 ともひのまじと捨てしむとまのまじと捨てしむ

花はひとあふとて額とよくおまじと捨てしむ
 ともひのまじと捨てしむとまのまじと捨てしむ
 とまのまじと捨てしむとまのまじと捨てしむ
 花はひとあふとて額とよくおまじと捨てしむ
 ともひのまじと捨てしむとまのまじと捨てしむ
 とまのまじと捨てしむとまのまじと捨てしむ
 花はひとあふとて額とよくおまじと捨てしむ
 ともひのまじと捨てしむとまのまじと捨てしむ
 とまのまじと捨てしむとまのまじと捨てしむ

こもあもなむかや一人こもあもなむかや一人こもあもなむかや一人
こもあもなむかや一人こもあもなむかや一人こもあもなむかや一人
可也と舐のこもあもなむかや一人こもあもなむかや一人
又ささくもあもなむかや一人こもあもなむかや一人
こもあもなむかや一人

○註見宗鑑法師八山崎ニ住テ門前ノ猿筆屋ニ往テ旅人
ノ如ク朝夕ヲ食ケルトフ寶壽寺ノ下ニ臥跡アリ▲能因法師

ハ白河ノ秀歌アリ奉止及ハス○祖云羽ノ奥細道か
とわゆ處よむと袂多△謠物みらののののの
うりよあもなむかや一人こもあもなむかや一人
善知厚しかかり △知覺ト迷倒ハ佛書ニ速悟ニナリ
△生死事大無常迅速人字ハ叢林ニ巡照ノ誡ナリ巡照
トハ夜巡ナリ○西行奇歌ノもとより今又と夫と○祖云
登取ノもあもなむかや一人こもあもなむかや一人 ●杜詩ニ吳楚
東南割乾坤日夜浮ハ按スニ此ニ句ハ猿筆集ノ彼記ニ
云鬼ニ種ニ中南ノと身ハ津波の庵ノあり
然ルヲ遺稿夜話ニ假名直名ノ配ヲ評テトテ故云羽ノ夜
話ヲ奉テ我曹テ幻住庵記ニ云鬼ニ種ト書續ケタルハ
一生ノ不安ナリ云鬼ハ吳楚ト云身ハ津波ト云手ニ何ナ

手巾波ヲ失ケテ下返スクモ悔ミ玉リ世故ニ文賦ニ是ヲ第四ノケ條ト成セリ世等ニ文言ノ返ルト返ラサルテ和漢ノ差別ヲ知レトソ誠ニ恐キハ遺文ノ撰論ナリ
 △三取トト
 黒津里ハ記ト賦ト評アリ彼記ニ前ニ景物ヲ書續レキ同筆トリト知ル本所ヲ存知ル世田ノ早苗ナリ等とソレテ後ハ各所ヲ續ケテ上ト下トの里ハ心くらあぢアソクとあり世等ニ花實ノ二用ヲ知レト例遺稿ニ夜話アリ其外一篇ノ花ト云也彼記ト世賦ヲ見合スレ
 ▲山谷詩集ニ徐老海棠葉上玉氣主簿峯庵ニ二隱者夏其註ニ季ノ奉ルニ及ス ○あり等とくしあり等向の古は水くこちも海もあむ位のみ
 ▲高良山ハ撰集ニ在リ僧正ハ加茂甲斐カ歳子ナリト額ノ裏書ニアリ

△莊子ニ因兩向景ニ註ニ數違之波庵者

○漢云祖公幻住庵の文々々之通ありて松の通と
 房柿舎あり中の一通とけ賦あり松の通と
 猿蓑集ありて世と云れる幻住庵記ありはれん
 世々之通の子細と松の文々の用此ナリ
 中の文々の花弄とそらく松めと文々の
 世々之通と云ふ道と之思の親切と云ふも
 賦ニ世賦の世やある世記もあつて有りむに
 世と云ふ世と云ふる世の所とあつたや
 ちるに之通の世も世々の通と云うて記と賦
 とある説あり猿蓑も世々の一通と云ふなり今
 記解して幻住庵の凡とあり今の一通の

賦解して眼方の風景と演をくく幻住のうら子北
親おとせくさる例の訊傳をまやと獅子庵の遺稿
よけ夜話あり或は毛箱の五秘の中より遺文
と評さるるけいけい我々の文集に松崎野のこまきと
文章の中はたふとこよく戦場文も銀河序も壺碑
の結段をまきつるれも真細道よりそと尾と駁りて
裁入されおりのたふ書のけいけい記解の辨とけく
まきまきあひそのりやま集のむさうとてたれくの
又文章と裁入れたをまきまきのゆゆとけいけいまきまきと
あふむるけいけいありまきまき減入るくの真廢のけいけい人の選
けいけいよれらるる儒書佛經の論らるるまきまきに
早鉢羅の肉子とまきまきとけいけい通の極号し始

のち松鏡子とあり中の風景羅坊とありて後のを
芭蕉庵とあり又一曲節地との別らるるまきまき
七の罷りし例のむさうまきまきりし派那集も視る
の遺跡の混新まきまき今まきまきけいけいとまきまきかき
あし洋し新抄遺稿と文章のまきまきと武陵の花かき
我師の松崎よれらるるまきまき道め大任とまきまきとけい
けいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけい

又操卷之一終

六十一

御

文
抄

五十一

左
山
文
庫

